

古伊万里

ジャパンプルーといわれた藍色



出土遺跡 矢加部町屋敷遺跡

伊万里焼は佐賀県有田町を中心とする地域で生産された磁器の総称で、有田や三川内、波佐見などの製品が含まれています。製品の主な積み出し港が伊万里であったことから「伊万里焼」と呼ばれました。

伊万里焼の中でも江戸時代のものを「古伊万里」といいます。温かみのある手描きの文様と呉須の色合いで骨董愛好者に人気があります。複数の色を透明釉の上に掛ける「色絵」や金色を付ける「金襴手」もありますが、ほとんどは呉須単色です。

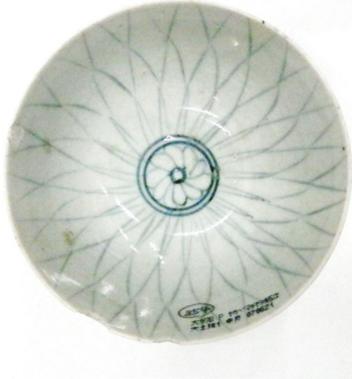
日本人はなぜか藍色を好みます。水墨画も好まれましたが日用品にモノトーンを使うのは寂しすぎるからでしょうか。着物にも藍染めが多く用いられており、明治の始めに来日したイギリスの化学者のアトキンソン氏は藍の色を「ジャパン・ブルー」と呼んで賞賛しました。

「古伊万里」は芸術性の高い高級品がある一方で、大量生産により庶民向けの低価格の日用食器も全国に出荷しました。なかでも波佐見では厚手で文様の簡素な「くらわんか手」と呼ばれる碗や皿を大量に作っていました。

資料は江戸時代中期から幕末（18世紀前半～19世紀前半）のものです。



3-2 輸出ブランドにもなった！古伊万里



網目文碗

網目文は現代でも使われる文様です。内面は1重網目が中央に向かって均一に収束するため上から見ると花のように見えます。



蛸唐草文牡丹長皿

蛸唐草は江戸時代中期に登場するデザインで、時代とともに変化していきます。本品のように大きな唐草からいくつもの小唐草が複雑に分岐する蛸唐草文が、時代が新しくなるほど単純化していきます。高台銘款は吉祥句の「富貴長春」、四方には梅花つきの蛸唐草文様が描かれています。



花唐草文輪花小皿

口縁には口鏤^{さび}を施し、周りの唐草文様の中には3つの小さな5弁花をバランスよく配しています。中央の五弁花文がデザインを引締めています。



みじん なます
微塵唐草文 膾 皿

丹念に描かれた微塵唐草に鹿の子文がアクセントとなっています。中央には環状に「松」「竹」「梅」が描かれています。

参考文献：福岡県教育委員会 2011『矢加部町屋敷遺跡Ⅲ』有明海沿岸道路関係埋蔵文化財調査報告第11集
福岡県教育委員会 2012『矢加部町屋敷遺跡Ⅳ 蒲船津西ノ内遺跡 蒲船津水町遺跡』有明海沿岸道路関係埋蔵文化財調査報告第12集

写真：当館撮影